

●「笑い」は緊張の中から生まれます。厳しい現実立たされた時、人は「解放としての笑い」を求め、大切にしてきました。ユダヤ人のラビ・トケイヤーさんは、ユダヤ人は息詰まるような深刻な環境、差別や迫害という厳しい歴史を経てきたからこそ「笑い」を大切に、そのユーモアのセンスが与えられたのだと告げています。

また旧約聖書学者の池田裕さんは「ヘブライ人（イスラエル人）は常に苦難の道を歩んできたが、彼らは笑いを知っていた民族であり、しかもその笑いは他の民族には見られない『ヘブライ的笑い』である。つまりそれは裸の自分を笑う笑いである」と述べておられます。

聖書には沢山の人間の失敗の歴史や物語を包み隠さず記していますが、今日の「預言者ヨナの話」もその一つです。

●神様の命令に背いて船で逃げ出した預言者ヨナが、嵐の海に放り出され、魚のお腹の中で悔い改め、神様に従順に従うものと変えられて、神様のご用を無事に果たすという内容が1章から3章までに記されています。しかし、この話の本当の面白さは4章にあります。この話は「ニネベの街の人々が救われて良かった」では終わらず、ヨナは怒りを露わにしようのです。それは、大嫌いなアッシリアの町の人々が赦され救われたからでした。アッシリアの国の残虐さは周辺諸国の恐怖の的で、神様を信じるイスラエルの民たちの憎悪の対象でした。内心ニネベは滅びてほしいとヨナは思っていたのです。そうして、怒るヨナに対して神様が、「どうしてわたしがこの大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか」と語りかけて物語が閉じられます。

●今日のヨナの話は偏狭な民族意識や頑なさ、自己中心的な人間の姿を預言者ヨナに重ねて、赤裸々に記し、神の前で人間がいかにか小さく偏狭な存在であるかを「笑い」を込めて記しているのです。そしてヨナを含む全ての神に逆らう人間を見捨てず、どこまでも愛し、神様のご用のために用いようとしてくださる神様の姿を証しているのです。それは新約聖書でも同じです。イエス様もまた、人間は皆神を前にして完全であり得ない罪人であるということを示されました。イエス様こそが緊張に満ちた世にあって人を本当に自由にし、救い、解放することにつながる「笑い」をもたらされた方だったに違いありません。

●私たちは神様の働きや思いを完全には理解できない存在です。自分の欠点や弱さを隠そうと躍起になるのではなく、自らの欠点や弱さを認めつつ、そんな私たちを愛し赦して下さる主なる神様をこそ褒め讃えて歩んでいきたいと思えます。